

40423

教科書文庫

4
110
33-1943
2000.0 69025

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

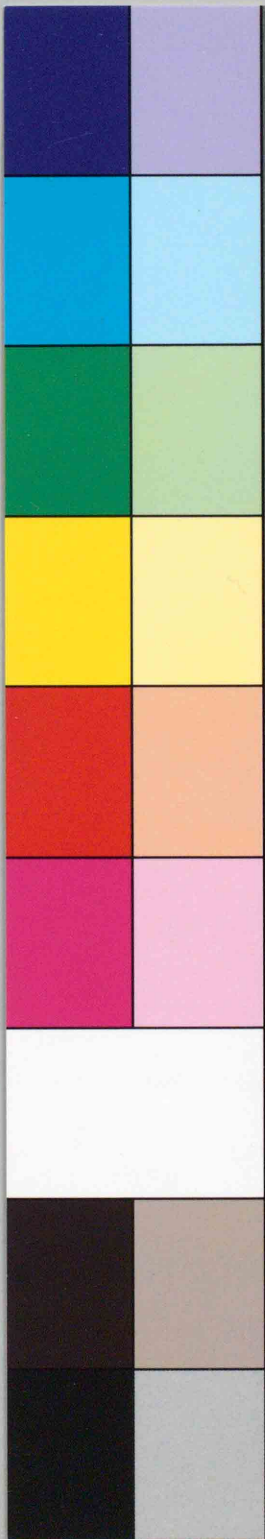
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



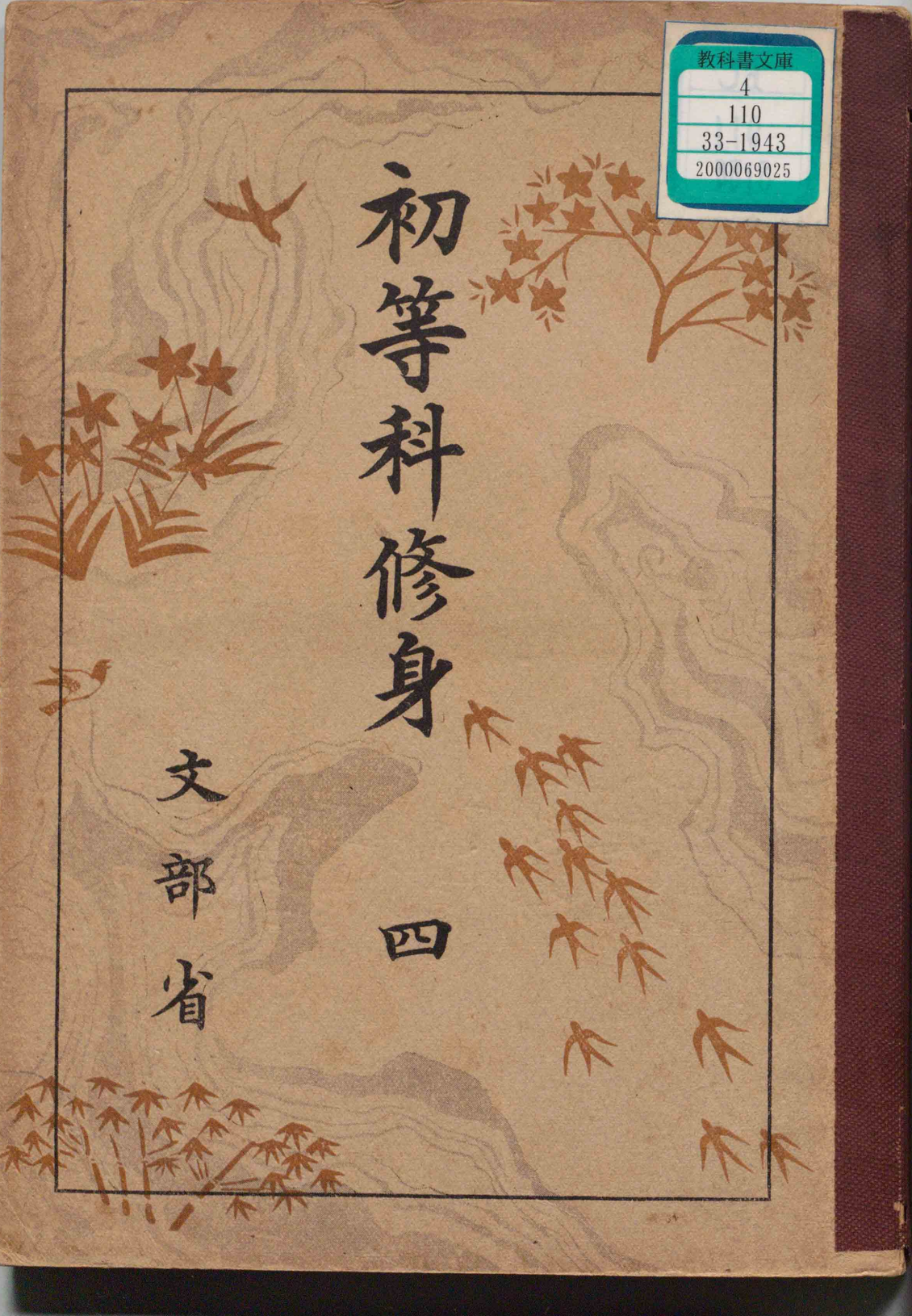
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

教科書文庫
4
110
33-1943
2000069025

初等科修身

四

文部省



4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

資料室

教科書文庫
4
110
33-1943
2000069025

32
110
5818

初等科修身

広島大学図書

2000069025



文
部
省

四



教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ
徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克
ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル
ハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實
ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲
ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉

シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ
ハ獨リ朕力忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫
臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬
ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ
拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月二十日

御名 御璽

昭和十四年五月二十二日

青少年學徒二賜ハリタル勅語

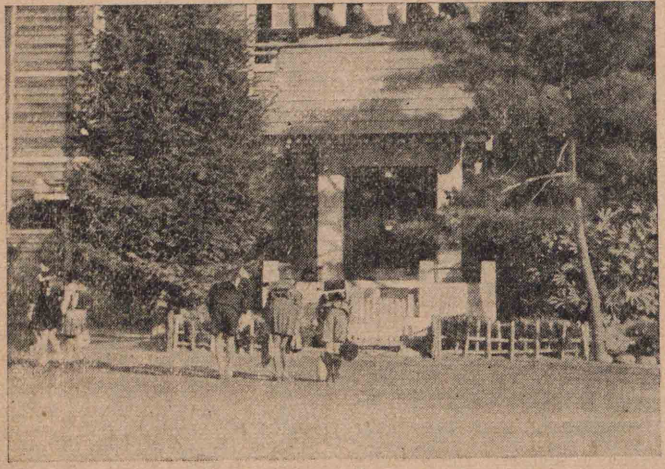
國本ニ培ヒ國カヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ
 永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道ヲ
 ル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繋リテ汝等青少
 年學徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥
 ヲ重ンジ古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ
 其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ
 失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ
 文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ以
 テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

目 録

一	大御心の奉體	一
二	私たちの家	八
三	青少年學徒の御親閲	十二
四	父と子	十八
五	師につかへる	二十四
六	松下村塾	三十二
七	野村望東尼	四十
八	國民皆兵	四十八
九	伊能忠敬	五十二

十	岩谷九十老	五十七
十一	松阪の一夜	六十四
十二	納税	七十一
十三	ダバオ開拓の父	七十四
十四	大嘗祭の御儀	八十二
十五	高田屋嘉兵衛	八十八
十六	日本刀	九十六
十七	鐵眼の一切經	百一
十八	帝國憲法	百七
十九	戰勝祝賀の日	百十一
二十	新しい世界	百十八

一 犬御心の奉體



一 犬御心の奉體

明治二十三年十月三十日、明治天皇は、皇國臣民の守らなければならぬ道の大本をおしめしに、なるため、教育に關する勅語をたまはりました。

勅語のはじめには、
朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ
肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツ

ルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心
ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ
精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス
と仰せられてあります。

ここにはわが皇室の御祖先のかたがたが、國をおはじ
めになるにあたつて、皇祖の神勅を奉體され、規模きぼまこと
に廣大くわんだいで、いつまでも動かないやうになされたこと、更に
御徳をお積みになり、臣民をおいつくしみになつたこと
をおのべになつてあります。また、皇國の臣民も忠と孝と
の大道を守り、すべてのものが心をあはせて、御代御代の
天皇におつかへ申しあげて來たことをおしめしになつ
てあります。

かうして、まづわが國がらのうるはしいところを明ら
かにし、教育のもとづかなければならない點をおさとし
あそばされたのであります。

勅語には次に、

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信
シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習
ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ
世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急ア

レハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕力忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラントのたまはせられました。

私たち臣民は、父母に孝行をつくし、兄弟姉妹^{し妹}仲よく暮し、夫婦たがひにむつまじくしなければなりません。友だちには信義を以てまじはり、つねに自分をひきしめて氣ままでなく、しかもひろく世間の人になさけをかけることが大切であります。また、學問ををさめ業務を習つて、知識^{ちしき}才能^{のう}を進め、徳あるりつばな人となり、進んで公共

のためをはかり、世間に役だつ仕事をしなければなりません。つねに國の定めを重んじて、法令をよく守ることが大切であります。いつたん國に事ある場合には、勇氣をふるひおこして、命をささげ、君國^{くんこく}のためにつくさなければなりません。このやうにして、あまつひつぎの大みわざをお助け申しあげるのが、私たち臣民のつとめであるとの仰せであります。

しかも、かやうな行ひをなしとげることには、天皇陛下の忠良な臣民であるばかりでなく、私たちの先祖がのこした美風をあらはすものであるとの、ありがたいおことば

であるのであります。

勅語には最後に、

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民
ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ
中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ
咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ
と、おいひ聞かせになつてをります。

右にしめされた皇國の道は、明治天皇が改めておきめ
になつたものではなく、實に皇祖皇宗のおのこしになつ
たみをしへであつて、皇祖皇宗の御子孫も臣民も、ともに
守らなければならぬ道としておしめしになつたので
あります。更に、この道は昔も今も變りなく、國の内外を
問はずどこにでも行はれるものであることをおさとし
になつてをります。

天皇は、御みづから臣民といつしよにこの道をお守り
になり、御實行になつて、みなその徳を一つにしようとの
仰せであります。まことにおそれ多いきはみと申さな
ければなりません。

私たちは、日夜この勅語を奉體して、大御心にそひたて
まつるやうにつとめなければなりません。

二 私たちの家

私たちの家では、父は一家の長として仕事にはげみ、母は一家の主婦として父を助けて家事にあたり、ともに一家の繁榮はんえいをはかつてゐます。

父母の前は祖父そふ、祖母ぼ、曾祖父そうそふ、曾祖母そうぼと、私たちの家は、先祖の人々が代々守り續けて來たものであります。先祖の人々が家の繁榮をはかつた心持は、父母と少しも變りがありません。

私たちは、このやうに深い先祖の恩を受けて生活してあるものです。したがつてこの恩を感謝して、先祖をあげめ尊び、家の繁榮をはかることは、自然の人情であり、またわが國古來の美風びふうであります。

昔、大伴家持おほとものかもちは、

劔つるぎ太刀たちいよよとぐべしいにしへゆさやけく負ひて來にしその名ぞ

といつて、一族をさどしました。

また菅原道真すがはらのみちざねの母は、道真が十五歳になつて元服した時に、名譽ある父祖の業をついで、いつそやう家をかかんにするやうにと、

久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしかな
な

とよみました。

先祖に對しては、祭祀を厚くすることが大切でありま
す。さうしてよく先祖の志をつぎ、先祖ののこした美風
をあらはすやうにつとめなければなりません。

一家の中で、一人でも多くよい人が出て、業務にはげみ、
君國のために力をつくせば、一家の繁榮を増すばかりで
なく、また一門の名譽を高めることになります。もしも
ただ一人でも不心得の者があつて、わるいことをしたり、

つとめを怠つたりするものがあれば、うち中の人に難儀
をかけて、親類までが肩身のせまい思ひをしなければな
りません。

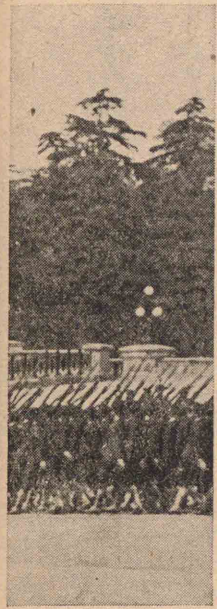
このやうに一人のおこなひのよしわるしは、ただちに
一家一門の幸不幸となり、先祖の人の名にもかかはるの
であります。それゆゑ、一家の人々は、みんな心をあはせ
て家の名譽と繁榮のために力をつくし、先祖に對しては
よい子孫となり、子孫に對しては、またりつばな先祖とな
るやうに、絶えず心がけなければなりません。

三 青少年學徒の御親閲

昭和十四年五月二十二日、かしこくも天皇陛下には、宮城二重橋前の廣場へお出ましになり、青少年學徒の代表者に、御親閲をたまはりました。

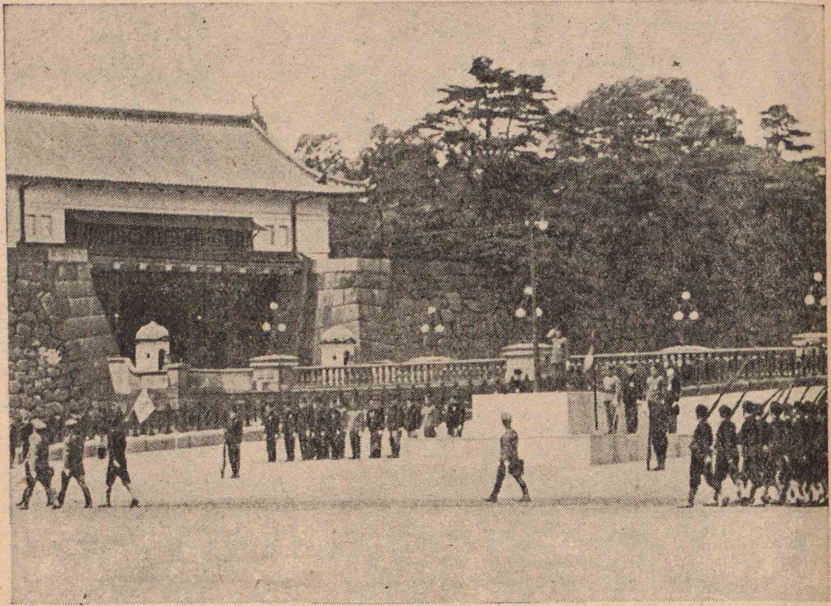
また御親閲の式が終つてから、文部大臣を宮中にお召しになつて、表御座所で全國の青少年學徒に勅語をたまはりました。

全國の學校では、みなこの光榮の日をえらんで、青少年



學徒にたまはりたる勅語の奉讀式をあげ、大御心を奉體し、皇運の隆昌をいつまでも守り續けて、聖恩にむくいたてまつるの覺悟を新しくするるのであります。

さうして、この日を記念するため、學校では、神社參拜をするほか、いろいろの行事をいたします。



青少年學徒にたまはりたる勅語は、私たちの心がまへについておさとしになつたものであります。國民學校の兒童として、私たちにいちばん大切なのは、陛下の赤子として、りつぱな日本人になる覺悟をしつかりかためることでもあります。

江戸時代の末に佐久良東雄といふ勤皇の志士がありました。この人が、
すめろぎにつかへまつれとわれを生みしわがたらちねは尊くありけり

といふ歌をうたつておますが、この精神こそ、わが皇國臣民の、世界に類のないもとめであります。國民學校は、かうした大切な精神をかためて、みんなりつぱな日本人になるために、教育する學校であります。

陛下の赤子として、私たちがりつぱな日本人になるためには、修練しなければなりません。

修練とは、がまん強い心と負けじ魂とを以て、なにごとでもほんたうに身につくやうにすることです。

學校でも、科目のすききらひをいふやうなことがあつてはなりません。またからだを丈夫にし、自學自修につとめて、向學心にもえなければなりません。

青少年學徒にたまはりたる勅語には、
國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世
ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠
シ而シテ其ノ任實ニ繋リテ汝等青少年學徒ノ雙肩
ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史
實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ
識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各
其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣
風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セ
ヨ

と仰せられてあります。國民學校では、この大御心にそ
ひたてまつるやう修練の教育を行います。

私たちは、各自の本分をつつしみ守つて、文武の修練を
怠らず、質實剛健がうけんの氣風をふるひ起さなければなりません。
それがそのまま、皇國の臣民として、世界に正しいこ
とを貫ぬき、平和をうち立てる大きなつとめを果すこと
になるのであります。

御親閱記念の日を近く迎へて、私たちは、はつきりとは
らをきめ、修練の日々を楽しく過すやうにいたしませう。

四 父と子

幕末のこと。杉百合之助の家では、春秋の二回、日をきめて、藩公毛利氏の先祖をまつてあるやしろと、氏神様におまゐりするならばしてあつた。

さうでなくても、百合之助は毎朝家のだれよりも早く起き、清水を汲んで先祖のみたまに供へ、西の方藩公のをられる萩城を拜し、東に向かつて、うやうやしく皇室のみさかえを祈ることにしてゐた。

ある年のその日の朝、あたりはまだ暗くしづまりかへつてゐた。

「梅太郎も、大次郎も、目がさめたか。」

聲をかけると、どちらが先ともなしに、兄弟二人がすぐに答へた。

「はい、どつくに起きてをります。」

「では、庭におりなさい。」

春まだ浅く、肌はだにせまるあかつきのやみのつめたさ。足もとにくづれるしも柱の色は見えぬが、地は堅くこぼつてゐる。

百合之助は、二人の男の子をつれて井戸ばたへ出た。

「いつもいふやうに、からだを洗ひ、心を清めるのだ。まづ、わたしが先にやる。」

くるくると着物を脱ぐと、つるべを取り、水を汲みあげて、つめたさをもいとはず、ざぶりと頭から浴びた。

「すがすがしい氣持だ。今度

は、梅太郎、なさい。」

「はい。」



まだ明けやらぬうす明かりの中に、汲みあげられる水は、氷のやうに白く光る。しかし、梅太郎は元氣よくかぶつた。

「さあ、次は大次郎。」

「はい。」

満々と水を汲み入れたつるべは、幼い大次郎の腕には、かなり重かつたが、それでも大次郎は、ゆつくりとあわてずに、ざぶりざぶりと上手に浴びた。

家の中では、あかのつかない、さつぱりした着物を取りそろへて、母が静かに待つてゐた。

「では、出かけるぞ。途中で人にあうても、ことばをかはしてはならない。」

父百合之助の聲は、いつもとは違つて、きびしさをふくんでゐた。

この宮まゐりの朝だけは、心をけがすことのないやう、家の外へ足をふみ出したら、決して人と口をきかぬと父と子は、かねてかたく約束してあつたのである。

この日、無事におまゐりをすまして、家に歸つてからのことであつた。

「梅太郎は、何を祈つた。」

と、父がたづねた。

「はい。皇室のみさかえを祈り、殿様の御無事を願ひました。」

「うむ。なるほど。では、大次郎は。」

「私も、第一に皇室のみさかえを祈りました。それから、自分がほんたうの日本國民になることをお誓ひいたしました。」

「ほんたうの日本國民とは、どういふことか。」

「臣民としての道を守り、命をささげて陛下の御ためにつくすのが、ほんたうの日本國民だと、玉木のをぢ様が」

教へてくださいました。」

「うむ。それを神様にお誓ひしたのか。」

百合之助は、わが子ながら大次郎は、あつばれな魂の持主だと心ひそかに感じいつた。

大次郎とは、だれあらう。のちに寅次郎と名を改め、をぢ吉田大助の家をついで、吉田松陰先生とあがめられるやうになつたその人である。

五 師につかへる

弘化三年、松陰が十七歳になつた時のことである。

きのふは、一日中ひどい風が吹いて、濱邊から海鳴りがとどろいて來た。今日もまだそのなごりで、庭木の枝のゆれる音が、耳についてならない。

このころ、松陰は林真人といふ先生の家に住みこんで、その教へを受けてゐた。松陰は、十一歳、十三歳、十五歳と三回ほど、藩主毛利敬親の前へ出て、兵學の講義をした。「よくできる。」

といつて、たいそうほめられたが、なかでも十五歳のをりには、はうびとして、七書直解といふ書物をいただいた。それでもなほ兵學をいよいよ深くきはめるため、努力を

續けたのである。

松陰の部屋は、二階になつてゐる。寝る前、窓べから見た大空には、雲はすつかり風に吹き拂はれて、あちこちにさえた色で光る星が仰がれた。

それから、どれくらゐの時間がたつたであらうか。松陰は、夢の中で、ただごとでないにほひを感じて、はつと目がさめた。がばとはね起きると、夢ではない。部屋いっぱいにもうもうたる煙が、うづを巻いてゐる。そのとたん、階下からも、けたたましい叫びが、つきあがつて來た。

「火事だ。」

「火事だ。」

松陰は、とつさに身支度をすまして、どとつと階段をかけおりに行つた。まだやまな、強い風にあふられて、火のまはりには早かつた。ほのほの勢はものすごく、もう手のつけやうもない。

「さわぐな。」

かけおりに來るやいなや、松陰はみんなを大聲でしかりつけた。家の人々は、ただうろろと逃げまどひ、わあわあ泣きわめくばかりであつた。

「女と子どもは、そのまま外へ行け。男はだいなもの

だけ運び出せ。」

煙は真黒になつて、もくもくと吹き出し始めた。女子どもは泣きながら戸外へとび出して行く。その後を追ひかけるやうにして、本箱や、たんすを引つかつた男たちが続いた。

松陰は一生けんめいになつて、本といふ本を手あたりしだいにつかみ出し、家の外へはふり出した。

めらめらと、あかいほのほが身近にせまつて来る。松陰がとび出すと、まもなく、ぱりぱり、めりめりど、ぱりや柱が響きをあげて、くづれ落ちた。ほのほの色は夜空をこ

がし、恐れをののく人々の顔を、ものすごく照らし出した。やがて、松陰の大奮闘によつて、書物の大部分と、家財道具のいくらかを取り出しただけで、林真人の家は後かたもなくなつて、一山の灰になつてしまつたのである。

休むひまもなく、後かたづけに元氣いつぱい働きながら、松陰は先生にあいさつをした。

「死人もなく、けが人もなかつたのは、なによりでした。」

「いや、それだけではない。きみの働きで、だいいじな書物が、ほとんど全部助つたのは、大きなさいはひだつた。それに引きかへ、きみが着のみ着のままになつて、書物

も着物も、みんな失つたのは、まことにお氣のどくだ。ありがたいやら、申しわけないやら、なんともいふことばがない。」

「私の持物など、少しも惜しいことはありません。」

「いや、ことに相すまないのは、きみが殿様からいたただいたあの七書直解を灰にしてしまったことだ。まことに取りかへしのつかないことをしたな。」

「あ、七書直解ですか。惜しいことは惜しかつたのですが、もうあれは十分はらに入れたつもりですし、また殿様には、私から重々おわびいたしますから、どうぞ御心

配なく。」

松陰はかへつて師と仰ぐ林先生を慰めるのであつた。ほんたうに松陰は自分のものを、何も惜しいとは思つてゐなかつた。むしろ、力が足りないため、もつとたくさん、いろいろのお手傳ひができなかつたことを、はづかしいとさへ考へてゐた。

師につかへるのに、私心があつてはならない。しかもどんな場合にも、自分をみがくのが、學問するものの態度である。松陰のおこなひは、つねに自分のまなぶところと、一つになつてゐたのだ。

六 松下村塾しやうかそんじゆ

冬ながら、もう十日餘りも風のないおだやかな天氣がつづく。

ここ松本村新道の杉家のやしきうちでは、のみやつちの音が、いそがしさうに響いてゐる。宅地の中にあつた小屋を手入れして、それを八でふ敷きの小さな家に建てなほさうといふのである。

松陰が二十八歳のとし。安政四年十一月のことであつた。

松陰は集つて来る村の子弟たちを教へみちびくため、をちの久保五郎左衛門の力ぞへで、その學舎をつくらうと思ひたつたのである。これからのびようとする青少年たちに、何かしら、手傳つてやりたかつたのだ。

おだやかな冬の日ざしを背に浴びながら、松陰はできあがつて行く家の前庭に、梅の木を植ゑてゐた。ふと足もとにさす影法師に氣がついて顔をあげると、高杉たかすぎ晋作しんさくがにこにこしながら近づいて来た。

高杉は今年の秋、塾にはいつたばかりの青年である。
「先生。いよいよよできあがりますね。」

「おかげでな。」

「しかし戸障子がありませんね。」

「ない。たたみもないぞ。しかし、ごさを敷けばよい。手入れをして、やつと雨露のもらないやうにするといい塾を前にして、松陰と晋作とは、ほほゑみながら、向かひ合つてゐた。」

けれども、まもなく塾が、その八でふきりの屋根の下で開かれるやうになると、だれとなく少しづつの金を出し合つて、障子を買つて來たり、また古だたみを持つて來たりして、粗末ながら、塾のかたちができあがつたのである。

本をたくさん讀むことが、そのままよいのではない。よい本をえらんで、その一さつ一さつが、自分の考へ方をしつかりさせる讀み方でなければならぬ。松陰はいつてもよい本をたくさん讀んでは、全部それを自分の身につけて、心をゆたかにしようつとめた。

門下の人々がふえて、八でふしかな塾は、だんだんせまくなつて來た。安政五年の三月ごろ、

「どうだ。ひとつぼくらの手で建て増しをしようではないか。」

といふ話が、だれいふとはなしに持ちあがつて、松陰先生

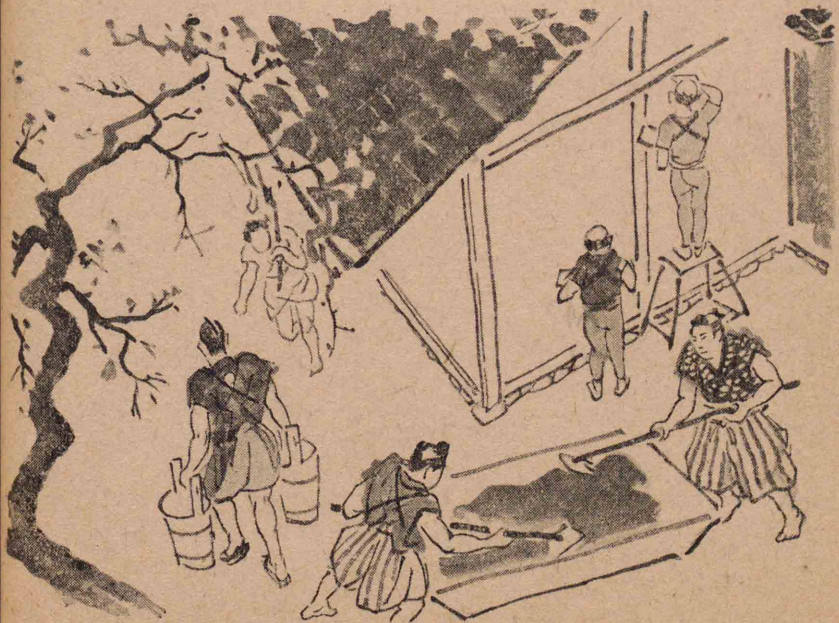
の許しが出ると、すぐその
明くる日から、塾生たちは、
みんなて木を運び、板を集
めた。工事が、にぎやかに
始つたのである。

血氣ざかりの青少年ば
かり。建て増し工事は、ま
たたくうちにはかどつた。
松陰ももちろん、先生みづ
から塾生といつしよにな

つて、柱を立てたり、壁土をこねたりした。

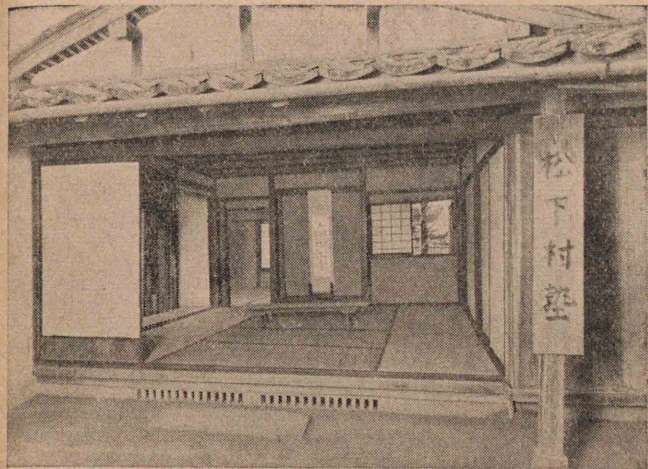
この塾で、松陰が教へた學問はいろいろある。もつと
も松陰の力こぶを入れたのは、皇室を尊び、至誠を以て貫
ぬき、實行力を持つ、といふ精神を養ふことであつた。江
戸數百年の間ねむつてゐた當時の人々をさとらせて、皇
室を尊ぶやうにさせなければならぬといふのである。
そのためには、一人でも多く大義に目ざめた人物が必要
である。さうして一人よりも百人、百人よりも千人、萬人。
日本國中の人々をゆりさまさなければならぬ。

松陰は、ひたすらこの大道を至誠を以て實行しよう



したのである。

わづかに十八でふの古い家の塾であつた。しかしこ



のせまい塾に集つた青少年の中から、久坂玄瑞、高杉晋作を始めとして、明治維新のをり、身を以て國事につくした大人物がたくさん出た。それに、村にのこつて、おのれををさめ、家を守つた弟子たちにも、一人としてまちがつたことをしたものはなかつた。みんな

松陰にみちびかれて、書物も讀めば、劍道もやる。あるひは養蠶をしたり、米つきをしたりして、魂をねりあげたのである。

松陰の塾を松下村塾と呼んだ。ここでは、武士の子も、農家の子も、へだてはなかつた。また松陰は、決して先生だといふ高慢な態度をとらなかつた。先生と塾生の膝と膝とが、くつついてゐる。禮儀は正しいが、へだてはなかつた。

塾は、だんだんと大きくなつて行つた。さうして、み國の柱となる忠義の士が、たくさんに生まれたのである。

七 野村望東尼

元治元年十一月、福岡平尾の山莊をおとづれた二人の武士があつた。一人は、筑前藩の勤皇家として知られた月形洗藏。いま一人はこのあたりに見かけない武士であるが、その丈の高さと、男らしいふるまひとが、ひどく人目をひく。

庭で落葉をかき集めてゐた老尼が、目ざとくこれを見つけて、

「月形様、ようこそおいでくださいました。」

といひながら、柴折戸まで出迎へた。洗藏は、

「今日は、めづらしいお客を案内いたしました。長州の高杉氏です。」

と紹介した。そこで、高杉は、いねいにあいさつをした。

老尼は、先に立つて二人を座敷へ案内する。座についた洗藏は、「お願いがあつて、まかり出ました。と申すのは、この高



杉晉作殿が、藩中佐幕派の壓迫を受け、當地へ身を寄せられました。ついては、どうか城下は人目にふれやしないので、ぜひともこちらのお力にすがりたいと考へて参つたのであります。

と、老尼に頼んだ。

山莊の主野村望東尼は、若い時から、夫新三郎の感化を受けて、勤皇の志に厚く、夫の死後髪をおろして尼となつてからは、特に志士たちに力をへをするため、必死になつて働いたのである。望東尼を慈母のやうにしたふ者は多く、山莊はいつも諸國の志士たちの集り場所にえらばれた。晉作が、ここに案内されたのも、實はそのためであつた。

ふと目を移すと庭先の木立の中に、小さな祠がある。建武の忠臣、楠木正成をまつてあるといふ望東尼の説明を聞かされて、晉作は奥ゆかしいものを感じずにはおられなかつた。

ここに手厚くもてなされてある間、朝夕顔を合はせ、ことばをかはすにつけても、男もおよばない女丈夫の魂にふれては、いよいよ心服するばかりであつた。

望東尼は、晉作から時勢について教へを受け、深く事態

を知り、いつそ勤皇の志をかためたのである。小倉まで来てあつた薩藩の西郷隆盛を晋作とあはせるやうにしたのも望東尼であつた。この時、晋作におくつた歌に、
くれなゐの大和錦もいろいろの糸まじへてぞあやは
おりける

もののふの大和心をより合はせただ一すぢの大綱に
せよ

とある。山莊での會見で、二英雄の意氣があつて、勤皇討幕の實をあげる薩長聯合の力強い大綱が用意されたのである。

ある日のこと、一通の手紙を受け取つた晋作は、望東尼の前に坐して、急いで歸國する旨をつげた。望東尼は、

「今こそあなたのお働きになる
時です。こんなこともあらう
と存じて、着物をととのへてお
きました。」

と、あらかじめ仕立てておいた着物に、羽織じゆばんまで取りそろへて、さし出した。晋作が感動し



たのはいふまでもない。

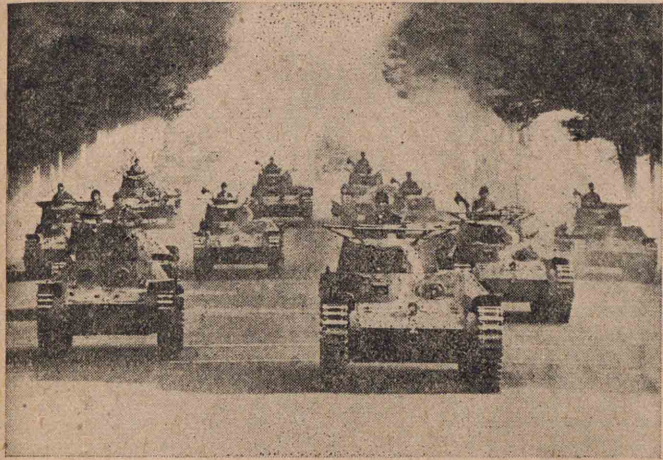
明治の大御代の開ける少し前かうしたやさしい女のカが、どれだけ新しい日本をつくりあげるのに役だったか、はかり知れないものがある。

男まさりの望東尼は、決して女らしさを忘れる人ではなかつた。玄海灘げんかいのなだ一孤島こたう姫島ひめしまに捕らはれの身となつた時も、女の身だしなみは、身を清くたもち、かたちをくづさないものだといつて、着物などもさつぱりしたものをつけ、きちんとすわつて、筆をとつたり、紙細工に工夫をこらしたりした。

志士の母ともいはれる野村望東尼は、勤皇のためになふれた人たちをとむらふの念から、自分の小指を切つて、その血で經文をうつしたこともある。また、慶應三年九月、討幕のため薩長聯合軍が進發するのを見送つたのち、「最後の御奉公をしなれば」とかたく心に誓ひ、宮市の天満宮にこもつて、勝利の祈願しよんをこめ、十七日間斷食だんじきをしたこともある。

女の身ながら、勤皇の精神にもえた望東尼の一生は、なんといふかがやかしいことであらう。平尾山莊は、今もなほ人々の心をはげましてあるのである。

八 國民皆兵かいへい



日本人は、本来平和を愛する國民であります。けれども、一朝國に事ある時は、一身一家を忘れ、大君の御楯みたてとして兵に召されることを男子の本懐ほんぐわいとし、この上ないほこりとして來てゐます。

大日本は、昔から一度も外國のために國威を傷つけられたこと

がありません。これは、まつたく御代御代の天皇の御稜みかさ威つのもとに、私たちの先祖が、きはめて忠誠勇武であつたことによるのであります。私たちも、また、心を一つにしてこの大日本を防衛し、先祖以來の光輝くわうきある歴史を無窮むきゆうに傳へる覺悟がなければなりません。

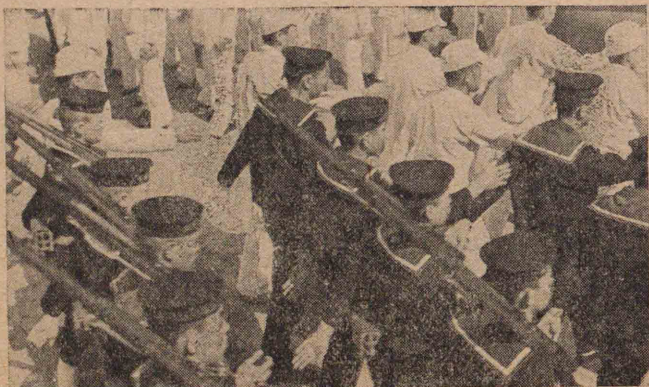
日本臣民中、滿十七歳から滿四十歳までの男子は、みな兵役に服するの義務があります。滿二十歳になると、かならず徴兵検査ちようへいを受け、現役兵となつて陸軍、あるひは海軍にはいるのであります。もし、國に一大事が起つた場合には、現役にある者はもちろん、みんな召集せうしふに應じて出

征する定めになつてゐます。

一たびいくさが始れば第一線に立つて働くのはいふまでもなく軍人であります。しかし今日のいくさは國と國とが全力をあげて戦ふのでありますから、眞の舉國一致いっしでなくては勝つことができません。したがつて、銃後の國民もまた第一線の將兵といつしよに、重大な任務をになふものであります。第一線に軍需品ぐんじゆひんを送り出す任務はもちろんのこと、いくさがどんなに長引いても生活を引きしめて、軍費ぐんびをつくり、産業をさかんにすることが必要です。

そればかりではありません。敵機がいつ私たちの上空に現れて、爆彈の雨を降らせるかわからないのであります。その時は、女でも子どもでも、沈ちん着ちやくにできるだけの任務を引き受けて、身を以て防護にあたらなければなりません。

戦時にあたつて、國防の目的を達成するためには、このやうに國の全力をあげて事にあたる國家總動員といふことが、いちばん大切であります。



日本男子たる者は、少年の時から身體を強健にし、元氣をやしなつて、成長ののちはみごとに徴兵検査に合格し、陸海軍にはいつて、名譽あるつとめを果すことができるやうに心がけなければなりません。また軍隊にはいれないやうな場合でも、つねに心身をねり、技能をみがいて、すはといへば、ただちにこれに應じて國難にあたること、が大切であります。

九 伊能忠敬

伊能忠敬は上總かづさに生まれ、十八歳の時、下總しもふま佐原の伊能氏の家をつぎました。

伊能氏は、代々酒をつくるのを業とし、土地で評判の資産家で、いろいろ地方のためにもつくしてあましたが、忠敬がついだころは、だいぶ家運がかたむいてあました。

忠敬は、どうかしてもとのやうにさかんにしようと思つて、一生けんめいに家業にはげみ、自分が先に立つて儉約しました。それで、家はしだいにはんじやうして、四十歳になるころには、以前よりもゆたかになりました。

忠敬は關東に二度もききんがあつた時、その都度、家風にしたがつて、金や米をたくさん出して、困つてゐる人々

を助けました。また公職について、村のためによくつく
しました。

五十歳になつた時、忠敬は家を長男にゆづり、翌年江戸
に出ました。そのまま引き込んで、らくをしようといふ
のではなく、もつぱら學問をして世のため人のためにつ
くさうと、こころざしたのであります。忠敬はもとか
ら天文曆法れきはふがすきで、これまでも仕事のひまひまには急
らず勉強をしたので、その知識ちしきはかなり深くなつてあま
した。

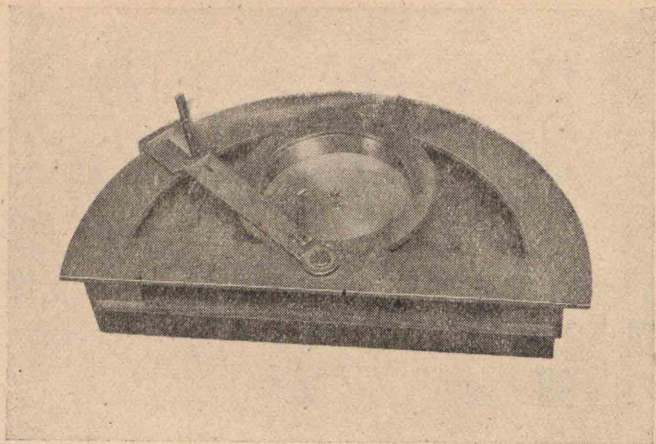
ある日、高橋至時よしときといふ天文學者がくしやをたづね、その西洋曆

法にくはしいのに感心して、自分よりも十九も年下の至

時の弟子になつて、教へを受けるこ
ととしました。それから數年間う
まずたゆまず勉強しましたので、大
いに上達し、特に觀測の術にかけて
は、同門中忠敬におよぶ者がないほ
どまでになりました。

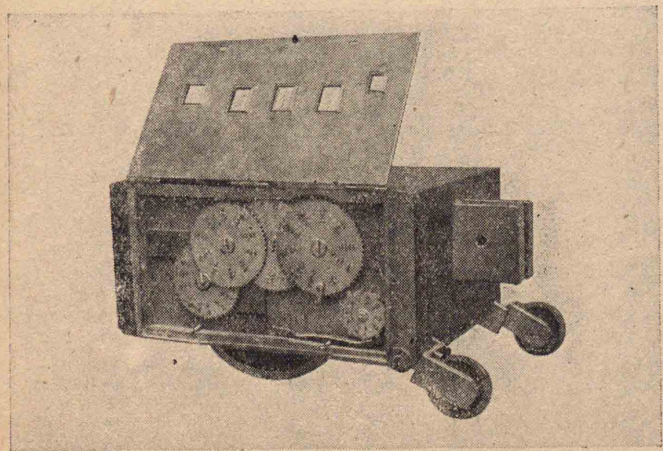
五十六歳の時、人跡ひとせきまれな北海道
の南東海岸を測量し、地圖を作つて

幕府ばくふにさし出しました。そののち、幕府の命を受けてあ



ちらこちら海陸を測量することになり、寒暑をいとはず遠方まで出かけて、とうとう全国の測量をなしとげました。

その時すでに七十二歳に達してあましたが、それからもからだの自由のきかなくなるまで、日本地図を作ることにつとめて、つひに大中小三種の精密な地図を作りあげたのでした。わが國の正しい位置や形状が始めて明らかになつたのは、ま



つたく忠敬が勤勉であつたたまものであります。

十 岩谷九十老

岩谷九十老は、石見國安濃郡川合村に生まれた。家は世々地方指をりの豪農であつたが、九十老は生まれ落ちる時から母の乳が出なかつたため、あるまづしい農家の里子として育てられた。

やや長じて家に歸つたのちの九十老は、すこぶるわんぱく者であつた。けれども、父はさすがに九十老の非凡なことを知つて別にこれをどがめず、かへつて、この子こ

そよく岩谷家をつぐ者であるといつて九十老を愛した。父は九十老をしつけるのに、ひたすら勤勞に服させる方法を取つた。八歳の時、始めて村醫について読み書きをまなばせたが、日課が終つて家に歸ると、すぐ奉公人といつしよに田や畠で働き、夜はかならず草履一足、または繩なは二十尋ひらをなはせるといふ風であつた。

二十六歳で家をつぐと、川合村四組總年寄役にあげられ、また濱田・福山・鳥取とっとり三藩の御用達を命ぜられた。九十老の一生を通じての事業は、この時に始つたのである。九十老の事業は、すこぶる多方面であつた。中でも、こ

の地方の人たちが今でもその徳とくをたたへてゐるのは、飢饉きん救濟きうさいのことである。

もともと、石見國は土地がやせ、五穀ごこくがゆたかでないから、一度天候がわるくなると、たちまち飢饉になつた。九十老が家を受けついで、天保四年から、家をその子にゆづつた明治二年まで、米や金をほどこし、米の安賣をして、難儀な人をすくつたことが、數十回、世の人は九十老を呼んで、米安様とか、米安大明神とか呼んだといふ。

天保七八年の大飢饉には、くらをからにして、難儀な人をすくひ、さらに福山藩の兵糧米ひやうかうまい五百俵へうの拂ひさげを

受けて、やつと、その年の急場をすくふことができた。
 明治二年の大凶作きようさくのをりには、私財しざい二萬貫文くわんもんをなげ出して、自分の子といつしよに全力をつくして救済につとめた。

慶應二年けいおうのことであつた。幕末維新まくまつゐしんの機はせまつて人心も不安であつたをりから、引き續いての不作になやんだ難民は、集つて暴動ぼうどうを起し始めた。

この知らせを受けると、九十老は、村内の小作人を集めて深く暴擧をいましめ、もししひて、かの暴民に加はらうとするなら、まづこの岩谷家をこはしてから行けといつた。けれども、だれ一人として、ことばをかへす者はない。



村の人たちにわる氣のないことを知つた九十老は、當時郷人が生神として仰ぐ石見國の宮物部神社ものべの神職といつしよに暴民の群を待ち受けて、その前に立ちふさがつた。九十老は、神職にさとさせたのち、聲をはげまして、

「今日のところは、私たち二人

にまかせてもらひたい。それとも、きみたちが暴擧を
續けるなら、たとへ、きみたちの槍先やりさきにかかつても、私た
ちは、ここを動かさない。二人を殺すか、その竹槍を捨て
るか、二つに一つの返答をせよ。」
と、大聲で叫んだ。

この氣勢にのまれた暴民たちは、にはかに、しりごみし
始めた。

「一の宮の生神様と米安大明神に出られては、おまかせ
するよりほかはない。」
だれいふとなく、かう返事をした。

かうした救済の反面に、九十老は、一日も勤儉と貯蓄ちりたくを
怠つたことがなかつた。ほとんど毎年不作凶變きようへんにてあ
つた九十老は、少しのひまもむだにせず働いただけでな
く、遊んでゐる者を見てはきびしくこれをいましめ、金の
ない者には金を與へ、職のない者には職を授けて、そのた
めの出費しゅつひとわづらはしさを少しもいとはなかつた。し
かも、自分自身は非常な儉約家であつた。九十老は、筆ま
めであり、ことに和歌をつくるのがたくみであつたが、原
稿かうは、すべて帳面の餘白または、ほごの裏にしたためた。
「紙を粗末にする者は、身代をたもつことができない。」

と、九十老はつねに人をいましめてゐた。美衣美食をさけたことは、いふまでもない。

「それ財を積まんと欲せば、必ず貧を守れ。貧を守れば、よく儉約を行ふを得、必ず富を致すを得べし。富を致すは、微を積み、大に至るを要とす。」

とは、九十老がその子に教へたことばであつた。

十一 松阪の一夜

本居宣長は、伊勢の國松阪の人である。若いころから讀書がすきで、將來學問を以て身を立てたいと、一心に勉強してゐた。

ある夏のなかば、宣長がかねて買ひつけの古本屋へ行くと、主人はあいさうよく迎へて、

「どうも残念なことでした。あなたが、よくおあひになりたいたいは、はれてゐた江戸の賀茂真淵先生が、先ほどお見えになりました。」

といふ。思ひがけないことばに宣長は驚いて、

「先生がどうしてこちらへ。」

「なんでも、山城大和方面の御旅行がすんで、これから參宮をなさるのださうです。あの新上屋におとまりに

なつて、さつきお出かけの途中何かめづらしい本はないか。ど、お寄りくださいました。

「それは惜しいことをした。どうかしてお目にかかりたいものだが。」

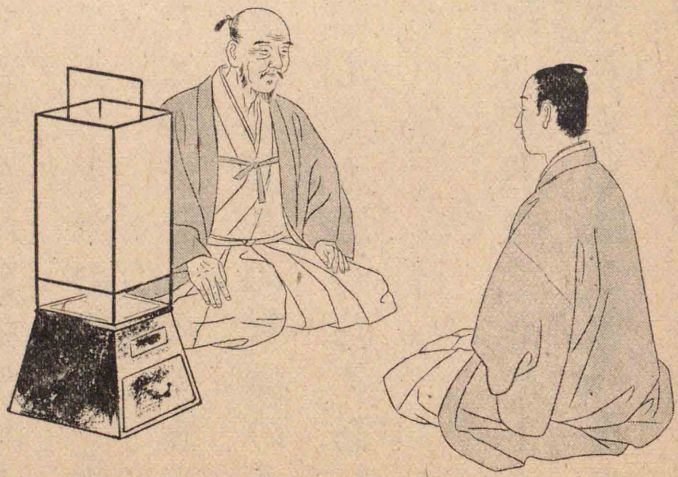
「あとを追つておいでになつたら、たいてい追ひつけませう。」

宣長は、大急ぎで真淵のやうすを聞き取つてあとを追つたが、松阪の町のはづれまで行つても、それらしい人はい見えない。次の宿の先まで行つてみたが、やはり追ひつけなかつた。宣長は力を落して、すごすこともどつて来た。

さうして新上屋の主人に萬一お歸りにまたとまられることがあつたら、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。

望みがかなつて、宣長が真淵を新上屋の一室にたづねることができたのは、それから数日ののちであつた。二人は、ほの暗い行燈のもとで對面した。

真淵はもう七十



歳に近く、いろいろつばな著書ちよしよもあつて、天下に聞えた
老大家。宣長はまだ三十歳餘りて、温和な人となりなりのう
ちに、どことなく才氣のひらめいてある少壯せうしやの學者。年
こそ違へ、二人は同じ學問の道をたどつてゐるのである。
だんだん話をしてゐるうちに、真淵は宣長の學識がくしきの尋
常じやうでないことを知つて、非常ひじやうにたのもしく思つた。話が
古事記のことにおよぶと、宣長は、

「私は、かねがね古事記を研究したいと思つてをります。
それについて、何か御注意くださることはございます
まいか。」

「それは、よいところにお氣づきでした。私も、實は早く
から古事記を研究したい考へはあつたのですが、それ
には萬葉集まんえふしふを調べておくことが大切だと思つて、その
方の研究に取りかかつたのです。ところが、いつのま
にか年を取つてしまつて、古事記に手をのばすことが
できなくなりました。あなたは、まだお若いから、しつ
かり努力なさいたら、きつとこの研究を大成すること
ができます。ただ、注意しなければならぬのは、順
序しゆじ正しく進むといふことです。これは、學問の研究に
は特に必要ですから、まづ土臺を作つて、それから一步

一步高くのぼり、最後の目的に達するやうになさい。夏なつの夜は、ふけやすい。家々の戸は、もう皆とぎされてゐる。老學者の言に深く感動した宣長は、未來の希望に胸ををどらせながら、ひっそりした町筋をわが家へ向かつた。

そののち、宣長は絶えず文通して真淵の教へを受け、師弟の關係は日一日と親密しんみつの度を加へたが、面會の機會は松阪の一夜以後とうとう來なかつた。

宣長は真淵の志を受けつぎ、三十五年の間努力に努力を續けて、つひに古事記の研究を大成した。有名な古事記傳といふ大著述だいしよじゆつはこの研究の結果で、わが國の學問の上うへに不滅の光を放つてゐる。

十二 納税

わが國を防衛して、その存立そんりつをまつたうするには、陸海軍のそなへがなくてはなりません。國民の教育を進め國運發展こくうんはつてんのもとゐを固くするには、學校のまうけがなければなりません。そのほか公共の安寧あんねい秩序ちつじよをたもち、通信交通つうしんを便べんにし、産業の發達をはかるなど、國民共同の福利ふくりを増すために、國でしなければならぬことがらが、た

くさんあります。したがって、國がこれらの仕事をするためには、たくさん費用がいらるのであります。

私たちは、國民としてこれらの費用を分擔するのが當然です。そのためには、租税を納めなければなりません。もし國民が租税を納めなければ、公共の事業に必要な費用の出しどころがありません。したがって、國民の幸福を進め、國をさかんにすることの望めないのはいふまでもなく、國の存立さへも危くなつて來ます。

税は、國の存立する力となるものであります。私たちは、納税が兵役とともに國民の大切な義務であることをよく心得て、國を愛するのまごころから、進んでこれを納めるやうにしたいものです。もし納税に關する申告を怠つたり、期限におくれて督促を受けたりするやうなことがあると、無益に公の手數をかけます。まして申告をいつはつたり、期限におくれて滞納處分を受けたりするやうなことは、自分の恥であるばかりでなく、國運發展のさまたげになるのであります。

私たちは皇國に生まれたものとして、りつぱにこの國民のつとめを果さなければなりません。

十三 ダバオ開拓の父

明治三十六年、二百五十人ばかりの一團を先頭に、日本人渡航者が相ついで、フィリピンへ向かった。

フィリピンの首都、マニラからおよそ三百キロ北の高い山の中に、バギオといふ町を新しく建設するため、その手始めとして、けはしい山坂を切りひらき、三十五キロといふ長い道路をつくらうとしたのである。

岩が落ちて来て、人がけがをする。できかかった道は、すぐにくづれる。そのため、フィリピン人も、アメリカ人も、支那人も、これまで果すことのできなかつた難事業を、今はしとげてみせようといふのである。

日本人は、しんばう強くて、よく働いた。けれども、やっぱりこの仕事はなまやさしいことではない。何人も病氣になつたり、けが人もたくさんできた。その上、日本人がいちばん困つたのは、急に食物が變つたことである。このまま仕事を續けてゐたのでは、みんな病氣になつてしまふかも知れない。

このやうすを知つて、義侠心を起したのは、マニラの町に住んでゐた太田恭三郎であつた。

恭三郎は、早く明治三十四年からマニラへ渡つて、そこで日本雑貨の輸入業をいとなんでゐた。渡航した時は、まだ二十六の若者であつたのである。

恭三郎は日本人渡航者たちの苦しみを見ては、じつとしてゐられず、フィリピン政府に相談して、これをすくふ工夫をするとともに、自分でれふしからいわしを買ひ求めて送ることにした。續いて梅干やたくあんづけなどをたくさんに送り届けた。

このことを聞いた日本人たちは、

「太田さんは、えらい人だ。太田さんは、ありがたい人だ。」

と、心から感謝して元氣つき、一生けんめいに働いたので、まもなくフィリピンの島に、ベンゲット道路といふりつぱな道路が、日本人の力でできあがつたのである。

ところが、今度はその日本人たちに、仕事のなくなる時が来た。早くもこのやうすを見た恭三郎は、またしてもこれをすくつてやらうと思ひ立ち、

「ダバオこそ日本人の新しく働くところだ。」

かう考へて、行末を心配する日本人たちをはげましなが、ら、まづ百八十人だけをダバオに送り、マニラ麻を作らせることにした。

そのころ、ダバオは非常にさびしいところであつた。恭三郎は、まだ二十九歳にしかなつてゐない。

三十八年には、二度ほど日本人をベンゲットからダバオへ送つたが、二度めの時には、自分もいつしよになつてミンダナオ島のダバオに移り住むことにした。さうして、いままでの輸入業をやめて、太田興業といふ新しい會社をつくり、廣大な畠に麻を栽培し始めたのである。

「日本人にマニラ麻がうまく作れるものか。」と、ばかにしてゐたアメリカ人やスペイン人をしり目にかけて恭三郎の會社はだんだん大きくなつて行つた。

それだけでなく、腕のある日本人たちは、引っぱりだこでみんなに麻の作り方を教へるやうにさへなつた。

「ありがたい。これで日本人は、ダバオにおちつくことができる。」

恭三郎は、心から喜んだのである。恭三郎の一生の望みは、どうしたら日本人が、海外でよくさかえることができるか、といふことであつた。この望みに向かつて、いつも全力をつくした。

ダバオにおちついてのちも、せつかく苦心した麻が暴風のため一夜で倒されてしまつたことがある。その時

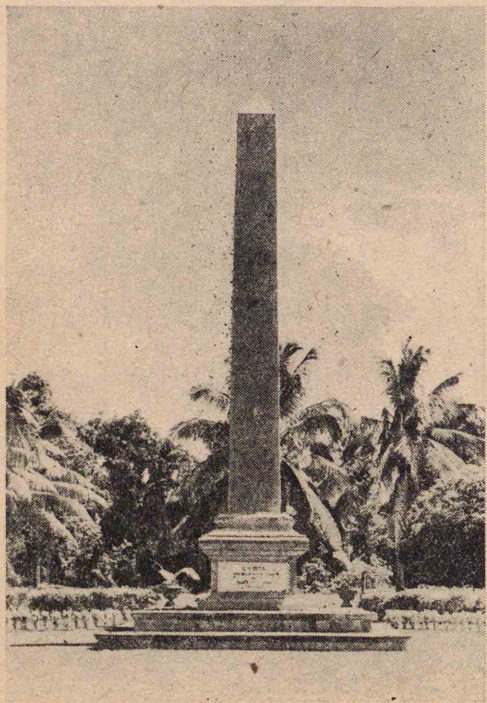
恭三郎は

「こんなことで、負けてなるものか。」

と、ををし、い氣持をふるひ起して、日本人たちをはげましながら、一生けんめいになつて復舊につとめた。また、かんばつの時に困らないやう、畠に水を引く大きな工事を始めたり、いつも先々のことを考へながら、こまかく氣をつかつて、仕事をした。

恭三郎は日本人のために學校をつくつたり、慰安ゐあんの設備をしたりした。その上、フィリピン人も日本人にならつて、しあはせになるやうにと、いふ大きな心から、病院を建てたり、道を開いたり、港をつくつたりした。大東亞戰爭になつて、フィリピンの島々から、アメリカ人を追ひ拂ふことのできる前、すでに恭三郎は、ダバオ開拓の父と仰がれる大きな事業をなすとげたのである。

ダバオのミントルといふところ、フィリピン群島第一の高峯かうほうアポを背にした緑深い山の上には、恭三郎のりつぱな記念碑きねんひが立つてゐる。



十四 大嘗祭の御儀

穂を重さうにたれて、金色の波をうつてみた稲の取り入れはもうすんで、十一月二十三日には、新嘗祭の日がまゐります。

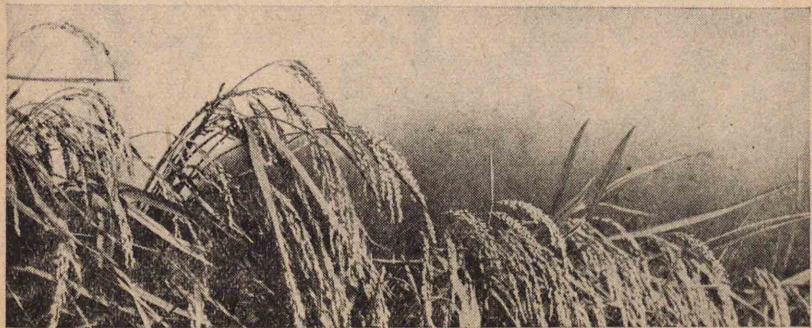
天皇陛下はこの日、今年の初穂を神々にお供へになつて、御みづからも新穀をきこしめすのであります。

新嘗祭の御儀は、毎年行はれるものであります。天皇御即位のはじめの新嘗祭を、特に大嘗祭と申してをります。

大嘗祭は、わが國でいちばん尊い、いちばん大切な御祭であります。御一代に御一度、神代そのままに、かうがうしいこの御祭をあそばされるのは、實にわが大日本が、神の國であるからであります。

皇祖天照大神は、高天原で五穀の種子を得られて、これを天の狭田、天の長田にお植ゑさせになり、やがてみのおつてから、大嘗殿できこしめされました。

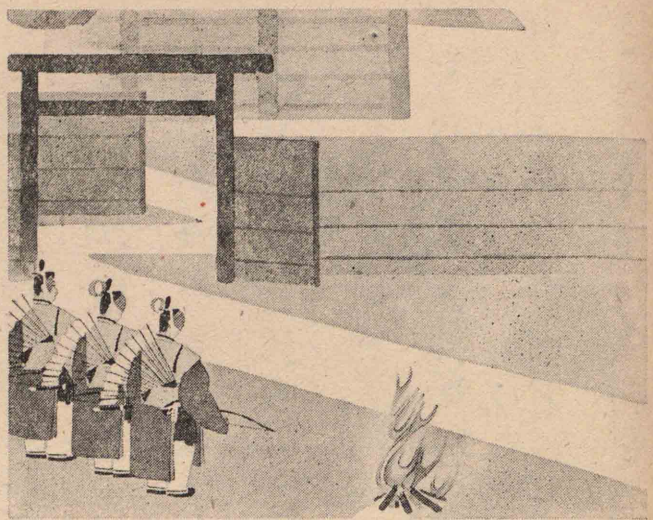
皇孫瓊杵尊の御降臨の時



「吾が高天原に御す齋庭の穂を以て、亦吾が兒に御せま
つる。」

と仰せられ、この稻を以て御祖先をまつり、御みづからも
きこしめし、萬民にも與へるやうにとおさとしになりました。
このやうなありがたい大御心にしたがつて、御代
御代の天皇は、この御祭をおごそかに行はせられたので
あります。

大嘗祭の御儀には、まづ悠紀主基の二地方に分けて、新
穀をたてまつる齋田をお定めになります。さうして、御
祭は特に京都で行はれるのであります。



がる庭燎の火に、黒木の柱と庭の上の敷砂とが、ほのかに
闇の中に浮かび出ました。

今上陛下の大嘗祭は、昭和三

年十一月十四日から十五日へ

かけて、行はせられました。

御儀式は、嚴肅をきはめたも

ので、夕方から始りました。宵

の御祭が行はれることになる

と、古式による御質素な殿舎が、

闇につつまれ、ときどきもえあ

陛下には、この時すでに、したしく被^はひ、みそぎ鎮^{みたましづめ}魂の御行事を終へさせられ、御祭服もかうがうしく、神殿に玉^{ぎよくほ}歩をお進めになつたのであります。

まづ、悠紀殿に渡^と御^{ぎよ}あらせられて、御みづから、天照大神やほかの神々をおまつりになり、白酒^{しろ}黒酒^{くろ}を始めとして、齋田の新穀をお供へになり、御自身もまたきこしめされました。

この間^{いね}稻^{つぎ}春^{うた}歌^{うた}風^{ふう}俗^{ぞく}歌^{うた}などが、けだかく、ゆかしい調子でゆるやかに歌はれ、かうがうしさは一段と加はりました。これこそ、實に大神と天皇とが御一體におなりあそばす

御神事であつて、わが大日本が神の國であることを明らかにするものと申さなければなりません。

宵の御祭が午後十一時過ぎにすみますと、今度は午前一時から、主基殿^{あかつき}で、曉の御祭が始り、それが夜明け方まで續きました。

天も地もおのづから、森^{しん}嚴^{げん}きはまりないうちに、陛下は秋のゆたかなみのりについて、御禮をお申しのべになり、更に、民^{たみ}草^{くさ}のために、大神の御恵みをお願いになつたのであります。大御心のほどがうかがはれて、まことにおそれ多いことでありました。

大嘗祭の終りには、國民すべてにこの大御心をたまはるおぼしめして、重だつた人々に酒饌しゅせんをおくだしになつたのであります。

この日、帝國の臣民は、いづれも業を休み、おこなひをつつしんで大御心を奉體し、一君萬民の至誠をあらはしました。私たちは、この記念すべき日を思うて、神の國日本に生まれた喜びと信念とを新しくするものであります。

十五 高田屋嘉兵衛

高田屋嘉兵衛は淡路あはぢの人で、子どももの時から船乗りとなつて人にやどはれてあましたが、のち兵庫へ出て回漕くわいそう業を始めました。さうして、まだあまり人の行かなかつた北海道へまでも出かけ、内地の米や塩を向かふの鮭さけや昆布こんぶなどと交易かうえきして家業につとめたので、家がしだいにゆたかになりました。

そのころ、ロシヤ人がしきりに千島に入り込むらしいので、幕府は警備の役人を出しました。更に、國後くわつご擇捉えとつとへの航路を開かうと思つて、特に熟練じゆくれんした船長をつのりましたが、北の方の海は寒氣もきびしく、波風もはげしくて危険きけんが多いので、だれ一人應ずる者がありません。嘉兵

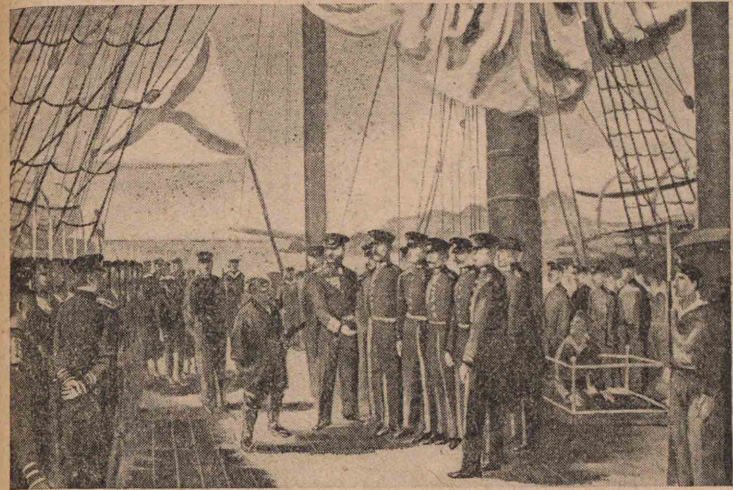
衛は深く決心して、進んでこの困難な仕事を引き受けました。

嘉兵衛は、まづ國後島に渡りました。國後から擇捉へ渡る海上はことに難所ですから、いろいろ苦心して潮流のやうすを調べた結果、まはり路をすれば安全であることを見きはめ、決心して船を出しました。しばらくすると、霧が深くなつて行先も見えなくなり、その上初めての航路なので、水夫らはしきりに危険を氣づかひましたが、嘉兵衛は自分の考へどほりに船を進めて、無事に擇捉島へ着きました。さうして十分島内を視察して引き返し、

この航路の安全であることを報告しました。次の年にも、また幕府の命を受けて役人とともに擇捉島へ渡り、ところどころに漁場を開いて土人に産業を授けました。

そののち、ロシヤ人が樺太擇捉に来て、掠奪をした事件が起りました。そこで幕府の役人が警戒をしてゐると、たまたまロシヤの軍艦が測量に來





て、艦長ゴロブニンらが國後島に上陸したので、役人はこれを捕らへて函館へつれ去りました。軍艦に居残つてゐた副長リコルドは、いつたん逃げ歸り、明くる年また國後島近海へ來て、艦長の安否をただすために、日本人を捕らへようと待ちかまへておりました。そこへ嘉兵衛の船が通りかかったので、不意にこれをおそつて嘉兵衛らを捕らへ、その軍

艦につれて行きました。

艦上には、七十餘名の兵士が、ものものしく着剣した銃をたづさへずらりと並んでゐました。嘉兵衛は、平氣でその前を通つて、副長に面會しました。副長は、このやうすを見て、ただ人ではないと思ひ、大切にもてなしました。捕らはれの身となつて、どうどうカムチャツカへまでもつれて行かれた嘉兵衛は、少しも氣を落さず、この機会にわが國とロシヤとの紛争を解かうと思つて、まづ艦内の少年を相手にロシヤ語をまなび始めました。少し話ができるやうになつたころ、ある日、副長と語りあつてみ

ると、先にわが國に来て掠奪をしたのは、ロシヤの暴民ほうみんのしわざであつて、ロシヤ政府の指圖ではなかつたことがわかりました。そこで嘉兵衛は副長に、幕府に辯解べんかいをして、わびるがよい、とすすめました。

副長は、たいそう喜び、嘉兵衛を送つて國後島へ來ました。けれども、すぐには嘉兵衛を上陸させないで、まづその手下の水夫だけを上陸させ、ゴロブニンのことについて、幕府の役人からたしかな返事をもらつて來るやうにと命じました。さうして、三日のうちにその返事がなければ、嘉兵衛をまたつれ歸るぞと申し送りました。

嘉兵衛は、このうたがひ深いやり方を大いにいきどほり、交渉かうせうもはやこれまでと考へました。そこで、手下の者が涙ながらに船を去るのを見送るときつとなつて副長に、

「自分が今日まで恥をしのんで生きて來たのは、兩國の紛争を平和に解決かいけつしようと思つたためである。もし、仕返しをする氣なら、いつでもできたのだ。無事に解決の見こみがつかないほどなら、なんでおめおめと、ふたたびつれて行かれるものか。」

と、決死の覺悟をしめました。副長はその勢にのまれ

て、嘉兵衛をも續いて上陸させました。嘉兵衛は、國後島の役人と相談の上、副長とともに函館へ行き、ここでロシヤ人と幕府の役人との間に立つて事をまとめました。その結果、ロシヤからは先の掠奪をあやまり、わが方からはゴロブニンらを返して長い間もつれてゐた兩國のあらそひも、やつと解決しました。

十六 日本刀

刀は武士の魂である。昔の武士は、片時もこれを身のまはりからはなさなかつた。今の軍人も、軍刀には皆これをもちひてゐる。



日本刀の鋭利えいりなことは、今さらいふまでもない。源氏の重寶鬚切ひげきりの太刀は、首を打つと鬚まで切れたので、その名があり、波およぎ兼光かねみつといふ刀は、切られた人がそのまましばらくおよいでから首が落ちたと傳へられてゐる。そのほか、胃いぶとを切つた話、鐵砲を切つた刀、馬の平首を手綱たづなもろとも打ち落した話など、日本

刀の銳利を傳へる傳説は、かぞへきれないほどである。

しかし、日本刀は、ただ切れるといふばかりではなく、打ち合つて折れず、曲らないところに、すぐれた點がある。どんなにするとい刀でも、きり合つてすぐに折れたり曲つたりするのでは、役にたたないから、昔から刀工の苦心は、おもにこの點にはらはれて、特別なきたへ方を發達させた。すなはち、日本刀は全體を同一の鐵でつくるのではなく、切るのに必要な堅さを持つきたへにきたへた鐵と、折れないための柔かみを與へる鐵とを、重ね合はせてつくるのである。この違つた二つの鐵の重ね方には、い

ろいろあるが、柔かい鐵を刀の中心にし、そのまはりを堅い鐵で包むのが普通ふつのやり方である。

かうしてつukurられる日本刀は、よく切れて折れも曲りもしない上に、美しいといふことが、その特色をなしてゐる。長さ・幅・厚さのつりあひの取れた形、氣持よくぐつとはいつた反そり物打から切先へかけての輕やかな線、さうしたものにまづ心が打たれる。しかも、しつとりとなめらかで底光りのする鐵の色、直ま刃は亂みだ刃の刃文の美しさ、おかすことのできない氣品に至つては、とてもことばでは、いひあらはせないところである。

刀工が刀をきたへる時には、仕事場を清浄にし、しめなはを張り、神をまつり、精進潔齋して、一つち一つち魂を打ち込むのである。もし、このさい、少しでも心にくもりがあれば、できた刀は、どんなによく切れても、名刀にはかぞへられない。

平和を愛し、美を喜ぶわが國民の優美な性情と、善にくみし邪をにくむ道義心とは、實によく日本刀に具現されてゐるのである。



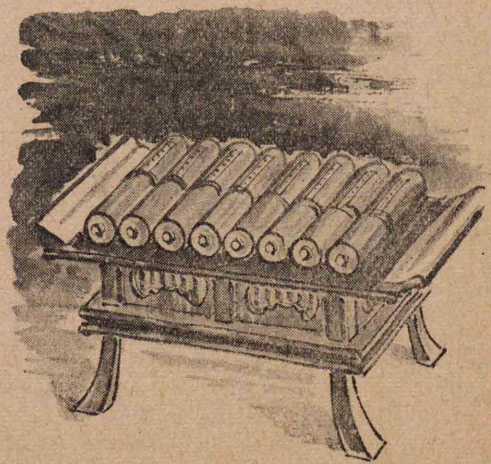
十七 鐵眼の一切經

一切經は、佛敎に關する書籍を集めた叢書であつて、佛敎にこころざす人にとつては、この上なく貴重なるものである。しかも、それは數千卷といふ大部なもので、これを出版するのは、容易なことではなかつた。したがつて、以前は支那から來たものが、ごくわづかあるだけで、いくらほしくても、なかなか手に入れることができなかつた。

今から二百數十年前、山城宇治の黄檗山萬福寺に、鐵眼といふ僧があつた。ある時鐵眼は、自分の生涯の仕事として、この一切經の出版を思ひたつた。さうしてどんな困難をしのんでも、かならず、このくはだてをなしとげようとかたく心に誓つた。

鐵眼は、廣く各地をめくり歩いて資金をつのり、數年かかつて、やうやくその資金をととのへることができた。

鐵眼がいよいよ出版に着手しようとした時である。大



阪地方に出水が起つた。たぐさんの死傷者ができ、家産を流失して路頭に迷ふ者は、かぞへきれないほどであつた。まのあたりに、このあはれなありさまを見て、鐵眼はじつとしてゐることができなかつた。

「自分が、一切經の出版を思ひたつたのは、佛教をさかんにしようとしてのことである。佛教をさかんにしようとすることは、つまり人をすくはうとするためである。喜捨を受けたこの金を一切經の



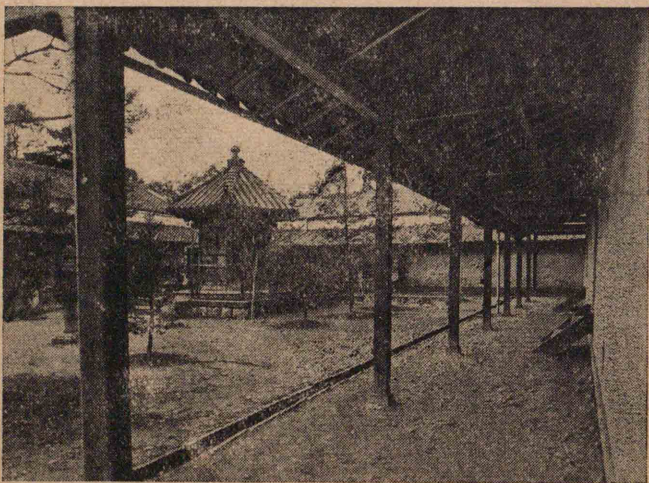
ためにつひやすのもうゑた人々の救助にもちひるのも、歸するところは同じである。一切經を世にひろめるのはもちろん大切である。けれども、人の死をすくふのはもつと大切である。」

かう思つた鐵眼は、喜捨してくれた人々の同意を得た上で、出版の資金全部を救助の費用にあてたのであつた。

苦心に苦心を重ねて集めた出版費は、すっかりなくなつた。しかし、鐵眼は少しも氣にかけず、また募集に着手した。それから更に數年、努力はむくいられて、いよいよ志を果すことのできる日が近づいた。

ところで、今度は近畿地方一帯に大飢饉があつて、人々の苦しみはこの前の洪水どころではなかつた。幕府は、

たくさんのすくひ小屋をつくつて、救助にあたつたが、人々の難儀は、日ましにつのつて行くばかりであつた。鐵眼は、ふたたび救済を決意した。かうして、鐵眼は二度資金を集めて、二度それを散じてしまつた。しかも、鐵眼は第三回の募集に着手した。かれの深



い慈悲心と、あくまで一念をひるがへさない熱意とが、世間の人々の心を動かさないうではおかなかつた。

われもわれもと多くの人々が、進んで寄附に應じた。

資金は、意外に早く集り、製版印刷のわぎは、着々として進んだ。鐵眼が、この大事業を思ひたつて以來十七年、天和元年に至つて、一切經六千九百五十六卷の大出版は、つひに完成された。これが、世に鐵眼版と稱されるもので、一切經が廣く日本に行はれるやうになつたのは、實にこれ以來のことである。

この版木は、今も萬福寺に保存され、三棟の倉庫にぎつしりつまつてある。

「鐵眼は、一生に三度、一切經を出版した。」

これは、のちに福田行誠といふ人が、鐵眼の事業を感歎していつたことばである。

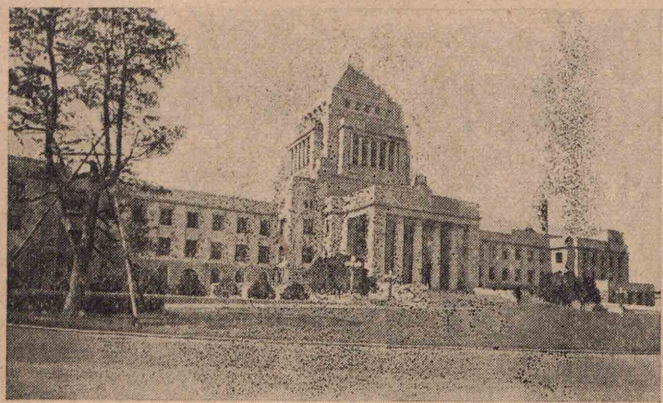
十八 帝國憲法

帝國憲法は、天皇が大日本をおすべになるための國のさだめであつて、最も大切なものであります。明治天皇は、皇祖皇宗の御遺訓にもとづき、皇國の隆昌と臣民の慶福とをお望みになる大御心から、この憲法をお定めにな

り、明治二十二年の紀元節きげんせつの日に御發布ごはつぷになりました。
 この時、臣民しんみんこぞつて御仁徳ごじんとくのほどを仰ぎたてまつり、上
 下の喜びは、國にみちあふれました。

憲法は、萬世ばんせい一系いつけいの天皇が大日本帝國をおすべになる
 ことを明らかにし、昔から變らないわが國體の大本をし
 めしてあります。また、臣民に國家の政治に加はる權利けんりを
 與へ、法律によつて、臣民の身體財産などを守り、臣民は兵
 役納税の義務を負ふことをきめてあります。

さうして、天皇がわが國をおすべになるのに、まつりご
 とについては國務大臣をお置きになつて、輔弼ほひつをおさせ
 になり、法律や豫算よさんは帝國議會ていこくぎかいの協贊けいさんをへておきめにな
 り、裁判は裁判所におさせになることになつてあります。



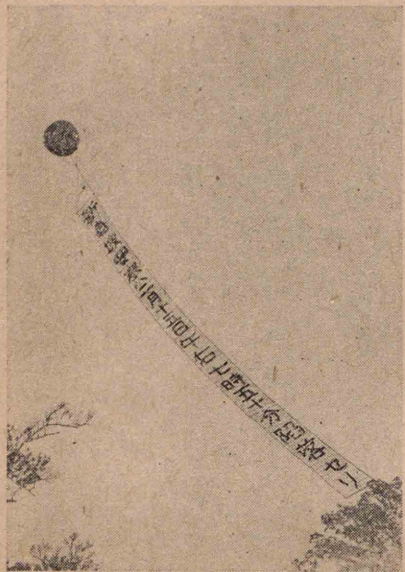
帝國議會は貴族院きぞくいんと衆議院しゅうぎいんとから
 できて、毎年召集されます。貴族院は
 皇族くわぞく華族くわぞくの議員や勅任ちよくにんされた議員で
 つくられ、衆議院は選舉權をもつ國民
 が公選した議員でつくられてあります。
 私たちは、帝國議會の議員を選舉し、
 あるひはその議員になつて、國の政治
 に加はることができるのであります。

議員を選挙するには、候補者の中から、おこなひがりつば
 であり、しつかりした考へをもつてある人をえらんで投
 票しなければなりません。自分だけの利益を考へて投
 票し、または他人にしひられて、適當と思はない人に投票
 することがあつてはなりません。なほ理由もないのに
 大切な選挙権をすてて投票しないのは、盡忠報國の精神
 にもとることになります。

憲法といつしよにお定めになつた皇室典範には、皇位
 繼承・踐祚即位など皇室に關する大切なことがしめして
 あります。

私たち帝國の臣民は、つねに皇室典範および帝國憲法
 を尊び、これをよく守つて、天皇の大みわざを翼賛したて
 まつらなければならぬのであります。

十九 戦勝祝賀の日



難攻不落をほこつてゐた
 のも、きのふの夢と消えて、皇
 軍は、昭和十七年二月八日、ジ
 ヨホール水道を突破し、大激
 戦ののち、十五日には、敵將以

下七萬の大軍を無條件で降伏させました。シンガポールの要塞は、みごとに陥落したのであります。

太平洋とインド洋をつなぐ關門として、大東亞海の守りを固め、昭南島が新しく生まれしました。ここは、今やわが大日本が皇道を明らかにする政治上、軍事上、また經濟上のきはめて大切な據點となつたのであります。爆撃機の轟音もまつたく絶えて、マライ人も、インド人も、支那人も、ほがらかに大東亞の建設のために働いてあります。

この昭南島の誕生をことほぐ祝賀の日のことでありました。二月十八日、早春の日ざしを受けた二重橋の上、深緑の中に、清らかな御乗馬「白雪」の姿が、くつきりと浮かびあがりました。

宮城前廣場に、あとから、あとからと續いてどよめいて、また歡呼の聲が、はたと消えて、水をうつたやうにしづまりかへります。この時、十數萬の民草は、みんな同じやうに、急にまなこを見はりました。

大元帥陛下には、馬上御ゆたかに、今しづしづと側近のかたがたをおしたがへになつて、出御あらせられます。さうして橋の上で御馬首を廣場の赤子へお向けになりました。

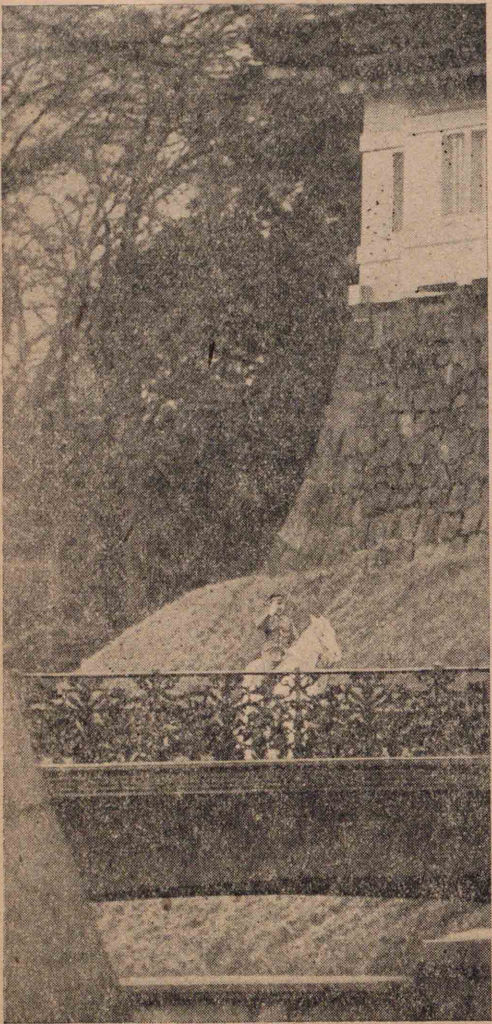
御稜威さんとしてかがやく大元帥陛下は、今ここにあらせられる。たとへやうのない感動に、胸はひきしまり、思はずかうべが低くたれます。

ああ、この時、指揮者はあなくても心は一つ。おのづから、寶祚の無窮を祈る萬歳の奉唱がわき起りました。廣場に寄せてはかへす赤子の波。その波は、かへすまもなく、まごころこめてうち續きます。

天皇陛下萬歳。 萬歳。

しばらくしづまりかへつたかと思ふまに、この聲がおごそかな君が代の奉唱にかはりました。

「君が代」の大きな齊唱は、だんだんと高まり、熱をおびて來ました。さうして廣場全體、老いも若きも、男も女も、感涙にむせんだのであります。制服の生徒も、産業戦士も、ひざまづいてゐます。玉砂利にひざまづきながら、幼い



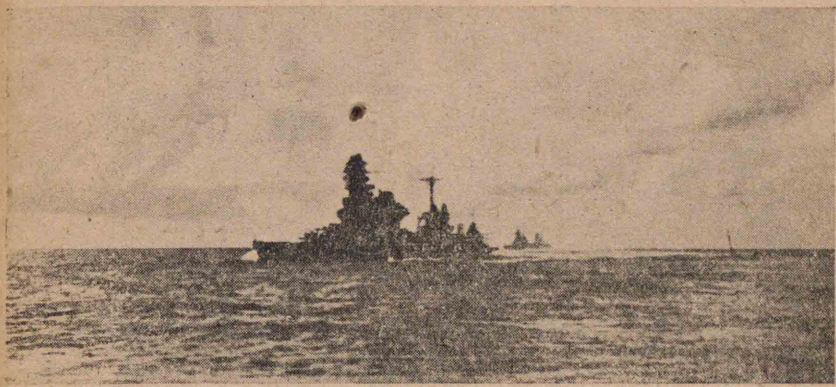
愛兒^{あいじ}とともに拜んでゐる母親もあります。

この「君が代」を奉唱する熱誠な民草に、おそれ多いことながら、二度三度、白い御手袋もはつきりと、御擧手の禮をたまはりました。やがて、陛下には、しづしづと御馬首をおめぐらしになつて、入御^{いんぎよ}あらせられました。

しかも、廣場の人たちの歡呼の聲がなりやまないうち、皇后陛下、皇太子殿下、照宮^{てるのみや}、孝宮^{たかのみや}、順宮^{よりのみや}、三内親王殿下^{な、しんのうてんか}は、おそろひで、橋上におでましになつたのであります。

皇后陛下の御手にも、皇太子殿下の御手にも、あざやかに日の丸の旗が拜されました。小旗は、ひらひらとして春淺い花かとも拜され、三内親王殿下もまた、御ともどもに廣場のどよめきに相和せられて、力強く國旗を御うち振りあそばされたのであります。

大東亞に新しい夜明けの光がさしたこのよい日、わが皇室の喜びを民草とともに、おわかちになつたありがたいさ、かたじけなさ。廣場に拜した民草の感激はいふまでもなく、私たちもまた、赤心奉公の忠誠を誓つて、いつの世までもこの光榮の日を忘れることができなないのであります。



二十 新しい世界

昭和十六年十二月八日、大東亞戦争の勃發以來、明かるい大きな希望がわき起つて來ました。昭和の聖代に生まれ、今までの歴史にない大きな事業をなしとげるほこりが感じられて、たくましい力がもりあがつたのであります。

わが日本と志を同じくするドイツ、

イタリヤ兩國もまた新しい歐洲をつくらうとして、地中海に、アフリカに、大西洋に、米英に對する戦をくりひろげ、またソ聯とも戦つてゐます。世界をわがものにしよといふ野心によつてつくられた古い世界が、しだいにくづれ落ち始めたのであります。

かうして、私たちの目の前には、喜びにみちみちた希望の朝がおとづれました。いろいろの國家が、ともにさかえる正しい新しい世界は、やがて築きあげられるにちがひありません。

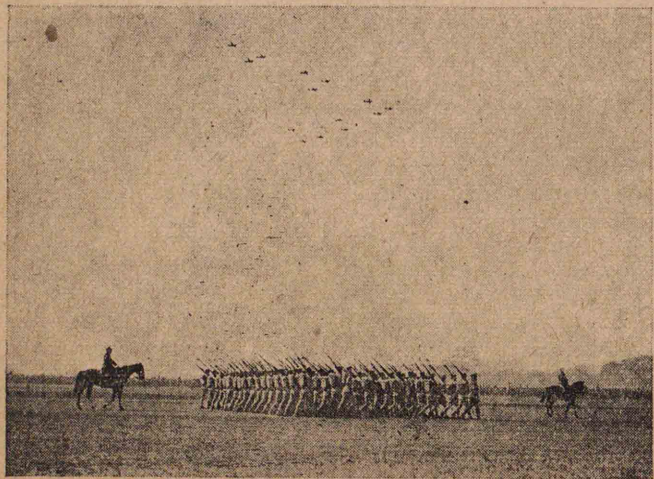
すでに滿洲國は、かがやかしい發展をとげました。國

民政府もまた支那で、着々とその基礎を固め、タイ國も、東部インド支那も、日本と親密な關係を結び、相たつさへて、大東亞建設のために、協力してゐます。

その上、わが戦果にかがやく南方の諸地方は、新生の光にあふれ、マライや昭南島、ビルマやフィリピン、東インド諸島に響く建設の音が、耳もと近く聞えて來ます。大東亞十億の力強い進軍が始つたのであります。日本は、大きな胸を開いて、あらゆる東亞の住民へ、手をにぎりあふやう呼びかけてゐます。日本人は、御稜威をかしこみ仰ぎ、世界にほんたうの平和をもたらさうとして、大東亞建

設の先頭に立ち續けるのであります。

私たちは、ゆたかな資源を確保し、軍備を固めて、敵を壓迫し、ををし、心がまへを以て、建設をなしとげなければなりません。この大事業のためには身をささげ、力をつくすことが、だいじであります。私たちは、希望にみちあふれ、必勝の信念を以て、立ちあがらなければなりません。身命をなげうつて、皇國のため



に奮闘努力しようとするこのををしきこそ、いちばん大切なものであります。

私たちは清く、明かるく、公明正大でなければなりません。男は、正しくたくましく、女は、すなほで強くあつてこそ、日本の國はいよいよさかえて行くことができるのであります。

日々の心がまへが、そのまま大きくなつての心がまへとなりまふ。このやうな心がまへで進む時、新しい世界は私たちの手でできあがるのであります。私たちこそ、といふ意氣ごみを以てのぞむとき、大東亞の建設はみごとになしとげられ、正しい世界が開けて來ます。

今はつきりと私たちの果さなければならぬ使命についてわきまへ、それを果すことのできる日本人となるやうつとめませう。

終

昭和十八年十一月十九日
文部省檢査濟

昭和十八年十一月十三日
昭和十八年十一月十五日
昭和十八年十一月十六日
昭和十八年十一月十三日
昭和十八年十一月十五日
昭和十八年十一月十六日
昭和十八年十一月十三日
昭和十八年十一月十五日
昭和十八年十一月十六日
昭和十八年十一月十三日
昭和十八年十一月十五日
昭和十八年十一月十六日

著作權所有

著作
發行
者兼

文
部
省

初等科修身四

定價 金貳拾四錢

わ



翻刻發行
兼印刷者

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社
代表者 井上源之丞

印刷所

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社工場

發行所

東京書籍株式會社

広島大学図書

2000069025

